変体仮名学習のための「古典籍原本画像と翻字テキスト対照ビュアー」の作成
―補助教材と図書館展示への導入例―

斎藤　達哉・鈴木　　泰・小山　利彦

1. はじめに

本稿は、変体仮名学習ツールとしての「古典籍原本画像と翻字テキスト対照ビュアー」（以下、対照ビュアーとする）の作成と導入例について報告するものである。

この対照ビュアーには、写本のデジタル画像（一次資料）と電子化テキスト（二次資料）との２画像を左右に対照さる機能、および、重ね合わせる機能を持たせている。

以下では、まずビュアーの機能についての紹介を行い、次に日本語学分野・日本文学分野での専門教育の補助教材としての使用例と図書館企画展での展示材料としての使用例とについて紹介する。

2. 古典籍原本画像と翻字テキスト対照ビュアー

2.1　制作の目的

日本語学、日本文学等、近代以前の古写本・古刊本を扱う学生にとって、「変体仮名」の習得は必須である。web 上では、写本・版本のデジタル画像（一次資料）や、電子化テキスト（二次資料）が提供されている。しかしながら、これらのデジタルアーカイブは、専門研究者の利用を想定したものであり、これから一次資料を読めるようになりたいという初心者の利用は想定されていないように見受けられる[1]。

斎藤は、米国議会図書館本「源氏物語」のデジタル画像と電子化テキストを対照表示できる変体仮名学習ツール（対照ビュアー）の提供[2]に参加した経験から、専修大学でのニーズに対応した実情に合わせた対照ビュアーの作成を企

画した。

対照ビュアーに使用する資料の選定に当っては、中古文学を専門とする小山が参画した。また、対照ビュアーの改良に当っては日本語学を専門とする鈴木が参画した。

2.2　機能

対照ビュアーは、コンテンツ株式会社（本社、岡山市）の「Contents View FLEX」を国立国語研究所がカスタマイズしたものに、更に手を加えることにより制作した。

「Contents View FLEX」は、当初、商業分野の展示でデジタルカメラやレンズの新旧製品の性能比較を紹介する目的で開発されたものであり、次の機能を持っている。

◇１画面内に２画像を左右に対照させて表示でき、さらに、２画像を連動させた状態で、移動および拡大・縮小ができる（図１「並べモード」）

◇２画像を重ね合わせ、ボタン操作によって透過させ、両方の画像を行き来させることができる（図２「重ねモード」）

◇タブレット端末でのスクロール、拡大・縮小が可能である

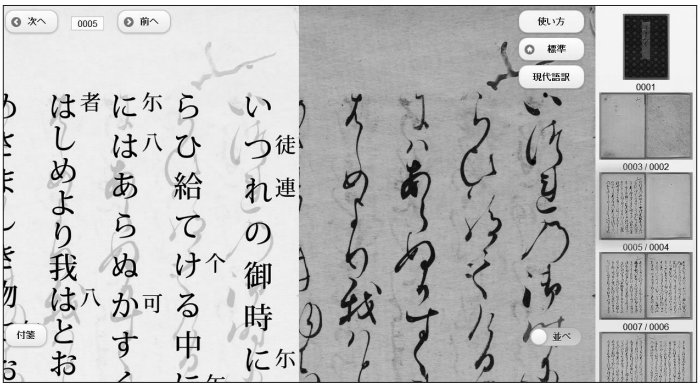

図１　並べモード

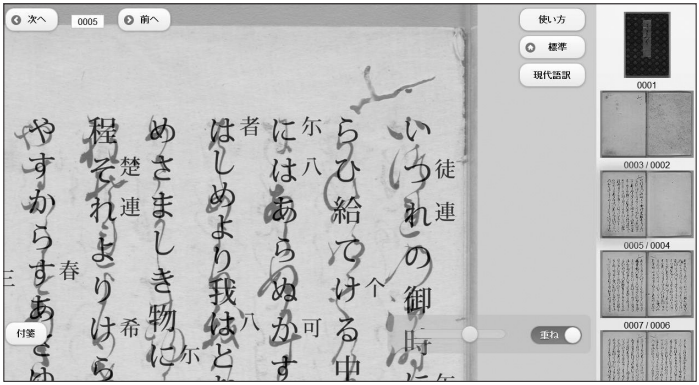

図２　重ねモード

古典籍での実用例は、すでに、米国議会図書館蔵『源氏物語』写本とその翻字テキストに適用したものが国立国語研究のサイトで公開されている[3]。

専修大学版では、上記の機能に加え、次の２点を追加している。

（１）　翻字本文に変体仮名の字母情報を添えることで、変体仮名の学習機能の強化を図った。（図３）。

（２）　別窓で現代語訳が表示できる機能を追加した（図４）。

（１）の字母情報の示し方は、書道関係の解説書や鑑賞用の図録での翻字（「釈文」とも称される）でも見られるものである。変体仮名は、「この文字は、どの字母を崩したものなのか」を確認しながら習得していくことが一般的である。肉筆で書かれる文字は、筆者や時代によって微妙に変形するものであるから、字母が分かっていないと応用が効かない。

（２）の現代語訳は、閲覧している資料に書かれている内容についての付加情報の提示である。書かれているおおよその内容が分かることは、変体仮名の学習においても、学習者の意欲を高める材料になりうる。また、現代語と古典語の対応関係を見ることのできる教材としても活用できることが期待できる。

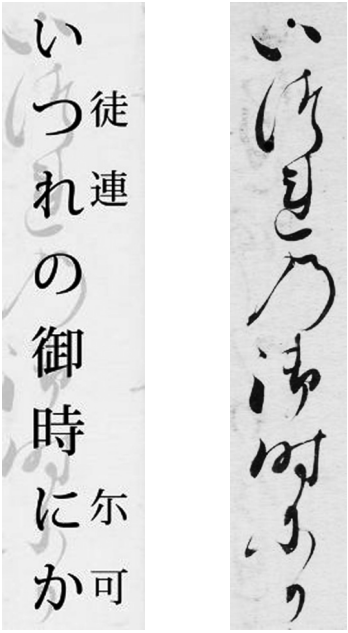

図3　字母を添えた翻字本文

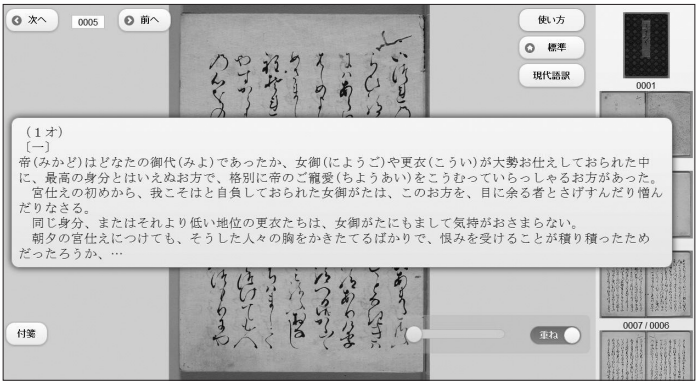

図4　現代語訳の表示機能

2.3　使用した古典籍

専修大学版では、本学図書館が所蔵する古典籍を使用した（理由は後述する）。

◇「源氏物語」（中山本）

伝・中山孝親（1512–1578）写、16 世紀写本

21.3 × 14.7cm、52 帖、写本

この写本は、極書に「源氏五十四帖/中山孝親卿御筆」とあり、室町末期の写本と考えられている。各帖異なる地色の唐草文金襴表紙に見返しは薄茶色に金箔ちらしという、豪華な装丁の本である。本文は、1 面 8 行で、仮名文字を中心として漢字を交ぜている。文字の丁寧さ、連綿の程度などから見て、初心者でも比較的判読しやすい写本である。

なお、対照ビュアーでは、「桐壺」巻（資料 ID：100949213）1 冊のみを収録しているが、変体仮名の学習のためには必要十分な分量である。

3.　大学での専門教育への導入

大学での授業への導入については、すでに、高田・小助川（2014）によって、国立国語研究所版対照ビュアーを使用した実践報告がなされているのでそちらに譲る。

ここでは、授業外での自習を想定した補助教材としての活用例について述べる。

3.1　自習教材としてのニーズ

日本語学、日本文学等、近代以前の古写本・古刊本を扱う学生にとって、「変体仮名」の習得は必須である。しかし、現在、変体仮名の習得そのものを教育の到達目標とした講義・演習科目は存在しない。変体仮名の知識を必要とする授業で、必要最小限の指導を行っているのが現状である。これは本学に限らず、全国的な流れとしてとらえることができる。

変体仮名を読むことのできる能力は、日本語学、日本文学の分野でも特殊技能化する傾向にあるが、一方で、授業中に変体仮名に触れたことが契機とな

り、更に読めるようになりたいという希望をもって研究室に相談に来る学生も散見され、教員が個別に指導をするという事例も生じた。

【指導例１】

◇対象学生：日本語学科２年次２名、３年次３名
（学年ごとに分け、２展開）

◇実施方法：週１回、研究室で約30分間、ワークブックによって学ぶ
（必要に応じて宿題を出すこともある）

◇教　　材：小島孝之著『古筆切で読む　くずし字練習帳』
（新典社、2006年）

【指導例２】

◇対象学生：日本語学科１年次２名

◇実施方法：学生が自宅等でワークブックを自習し、所定の分量まで到達した時点で、研究室を訪問し、理解度の確認をする
（実質的には月１回程度）

◇教　　材：小島孝之著『古筆切で読む　くずし字練習帳』
（新典社、2006年）

指導例１では、予復習が十分に行われないため、１週間後には、前回の学習内容を忘れていることが多く見うけられた。

指導例２は、特に意欲の高い学生であったこともあり、学習者自身が「どこがわからないか」を自覚したうえで研究室に質問に来ることになる。研究室では、弱点を補強することが中心になり、効果は上がった。

どちらの指導例も、同じワークブックを使用したが、このワークブックは、学生にはおおむね好評であった。その理由は、次の学生の意見が端的に示している。

◇聞いたことのある歌や、文章が例題として用いられていることで、文字自体が読めなくても、どの文字が現代のどの文字に当てはまるのか、見当をつけながら学ぶことができ、全く読めないはずのものがなんとなくでも読めることを嬉しく感じましたので、その点がとても良かったです
（日本語学科２年次）

一方で、馴染みのない教材が使われている箇所については、読解に苦労している様子が見られた。また、ワークブックはモノクロの影印を用いており、古典籍に慣れない学生にとっては、原典の汚れ・虫損などと文字とを見分けられない箇所もあり、戸惑う場面も見られた。こうした場面では、一時的に学生の意欲が下がってしまうこともあった。

また、ワークブックは、紙媒体であるために、書き込んでしまうと達成感が出てしまうという弊害もあった。

◇もう少し反復練習のために、例題があったら嬉しいかと思います

（日本語学科２年次）

という意見に代表されるように、反復練習が可能な教材の必要性を感じた。

3.2　自習教材として対照ビュアー

専修大学図書館には、多数の古典籍（写本）が所蔵されている。学生が変体仮名を学習する過程で、有名な古典籍の影印読解に取り組むことのほかに、自分の学んでいる大学の図書館所蔵の古典籍に接することも学習意欲を高める機会となりうる。

しかし、大学所蔵の古典籍を自由に手に取ることは、資料保護の観点から見て難しいことである。物理的に手を触れることは、資料の劣化に結び付くからである。

そこで、大学図書館が実物展示の機会を多く設けている古典籍を選び、普段は対照ビュアーによって、高精細の電子画像を実際の紙面をめくるように操作し、拡大も出来るという閲覧方法を取り入れることにした。対照ビュアーは、古典籍を傷めないことと、実物に触れる体験との中間的な存在と位置付けられよう。

専修大学版対照ビュアーの特徴は、（１）翻字本文に変体仮名の字母情報を添えることで、変体仮名の学習機能の強化を図ったこと、（２）別窓で現代語訳が表示できる機能を追加したことである。

なお、専修大学版対照ビュアーは、学生には好評を得ているが、機能面での改善を求める意見も見られた。

◇左上の「ページ No.」を直接入力できるとよい

◇左下の「付箋」に自分のメモを書き込めるとよい

◇現代語訳と翻字本文との対照が出来るとよい

こうした改良は、技術面ではコンテンツ株式会社で対応可能であると思われるが、費用面で実現できていないのが現状である。

4. 大学図書館展示への導入

対照ビュアーは、大学教育以外での使用も可能である。以下では、発展的な使用例として、専修大学図書館の協力を得て行った、図書館展示への導入について述べる。

4.1　図書館展示でのニーズ

大学教育以外でも、「変体仮名」学習の需要はある。

専修大学図書館によって行われている企画展は、書道を学んでいる人たちからも好評を得ている。変体仮名を書くことができる人は、各人の視点や目的をもって古典籍の実物を閲覧している。こうした方々には必要最小限の解説を付した展示であっても十分であろう。

しかし、来場者の多くは、学校教育で古文を読んだ経験はもつものの、変体仮名は読めないという人たちである。

2011年11月～12月に行った図書館企画展[4]では、古典籍をガラスケース内に陳列するという従来の方法での展示を行った。その際の「利用者アンケート」から、展示物の「文字の読解に関する意見」「現代語訳に関する意見」などを抜粋すると以下のとおりである。

（1）　文字と内容についての読解に関する意見

・展示物を読むことができない。読み方を書いたものがあると嬉しい

・展示物が読めれば、より興味が湧くので、例えば読み方教室を開いていただければありがたい

・古文には現代語訳を付けた方がよい

・文字がきれいだけれど、読めないのがほとんどであった

・何が書いてあるのか全くわからなかった
・開いたページの現代訳を添えてほしい
・現代訳が添付されていると分りやすいのではと思う
・展示資料に書かれている内容の現代語訳を簡単につけてほしい

このほかに、ガラスケース内に古典籍を並べるという従来どおりの陳列方だけでは対応しにくい意見も寄せられている。

（2）　陳列方法に関する意見

・巻物の全体を見てみたい
・本のはじめのページを見てみたい
・奥書が見られると、なおよかった
・表紙が重なっていて見えない
・解説文が、照明が弱く、読みづらい
・のぞき込まないと説明書きが見えない
・スライド式で光を取り入れ、拡大した展示だと見やすい

4.2　図書館展示での対照ビュアー使用

2015 年 7 月に行った展示[5]では、一部の資料の展示方法に改良を加えた。特に、「源氏物語」（中山本）については、以下の工夫を施した。

（1）　これまで同様にガラスケース内に古典籍を陳列したうえで、「本文」（字母付きの翻字本文）および「読みやすくした本文と現代語訳」（当て漢字や句読点を施した本文と現代語訳）を記載した解説パネルを添えた（図 7「解説パネル」）

（2）　実物を陳列したガラスケースの隣にノート型 PC を設置し、来場者が対照ビュアーを自由に操作できるようにした

パネルと対照ビュアーとによって、原文と現代語訳を並べて読むことはもちろん、展示箇所の前後のページも見ることも可能となった。

図書館職員によると、会期中、対照ビュアーについて、次の反響が見られた。

■本文■

① いつれの御時にか女御更衣あまたさふ
② らひ給てける中にいとやむことなききは
③ にはあらぬかすくれて時めき給ありけり
④ はしめより我はとおもひあかり給へる御かた／＼
⑤ めさましき物におとしめそねみ給ふおなし
⑥ 程それよりけらうのかういたちはまして
⑦ やすからすあさゆふの宮つかへにつけても人
⑧ の心をのみうこかしうらみをふつもりにや

■読みやすくした本文と現代語訳■

① いづれの御時にか、女御・更衣、数多さふ
どの帝の御代であったか、女御、更衣が大勢お仕え
② らひ給てける中に、いとやむことなき際
なさっていた中に、それほど高い御身分
③ にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。
ではない方で、とりわけ御寵愛を受けていらっしゃる方（桐壺更衣）がいた。
④ はじめより、「我は」と思ひあがり給へる御方々、
宮中に入った当初から、「自分こそは」と気負っておいでだった女御の方々は、
⑤ めざましき物に貶め嫉み給ふ。同じ
桐壺更衣を目障りな者だと思って蔑んだり妬んだりされた。桐壺更衣と同じ
⑥ 程、それより下﨟の更衣たちは、まして
身分の者や、それよりも低い身分の更衣たちは、女御たちよりももっと
⑦ 安からず、朝夕の宮仕へにつけても、人
気が気でなく、朝晩の御側仕えをするにつけても、他のお后たち
⑧ の心をのみ動かし、恨み負ふ積りにや、
の嫉妬心をかき立て、恨みを買うことが積もりに積もったせいだろうか、

図5　解説パネル

◇一般（地域住民）の方から、「このような素晴らしい教材があるなんて」と感激され、「もし市販されているようなら教えてほしい」と入手方法の問い合わせがあった

◇開催期間中、数時間かけてじっくりと電子資料を読んでいた学生の姿があった

古典籍の実物の展示方法は、ガラスケース越しの「静態」展示が基本である。それと並行して、対照ビュアーを供することにより、来場者が見たい箇所を自由にみられるという「動態」展示が可能になる。来場者には、「観覧」「見ることのできた喜び」ではなく、更に古典籍に近づいた「閲覧」「読むことのできた喜び」を提供できるものと考えている。

5. 改善点

対照ビュアーは、変体仮名学習ツールとして、おおむね好評であった。高精細の画像を使用し、拡大しても画像が鮮明であることに加え、並べモード、重ねモードでの動きは、タブレット端末の操作に慣れた学習者にとってストレスなく操作できるものとなっている。

ただし、現代語訳の表示と付せん機能については、利用者からの質問・意見が集中しており、機会があれば改良を行う余地があると考えている。

現代語訳の表示は、現状では、横書きの表示窓が画面中央に表示され、動かすことができない。そのため、画像や翻字本文と見比べる際に不便が生じている。縦書きでの表示にすることや、翻字本文との対照が可能な状態にするなどの対応が必要である。

付せん機能については、操作方法が分からないという声が聞かれた。そのためか、あまり活用されなかった。便利であることが分かるような説明を加えるか、操作方法が直感的に分かるように改良するかの手当が必要である。

なお、対照ビュアーの提供方法は、これまでは、

・使用者が、その都度 PC にコピーして起動させる

・大学サーバの教員の領域に置いて学内限定アクセスとする

といった方法をとってきた。今後は、より広い利用に向けて、古典籍原本を所

蔵する本学図書館や情報科学センターと相談しながら、適切な方法を探りたい。

さらに、今後、変体仮名学習に関する新たな電子教材として、商業用表記に使用されている変体仮名に関するものの必要性を感じている。

6. おわりに　―変体仮名学習の新たな方向性―

今回の対照ビュアーは、写本の変体仮名学習を主眼として作成した。しかし、変体仮名の学習は、古写本・古刊本を扱う学生にだけ必要とされるものではない。今後は、日本語教師を目指す学生をはじめ、国際交流に携わる者にとっても必要な知識になってくると考えられる社会状況が見られる。

以下では、商業用表記に用いられている変体仮名についての学習教材の需要について付言しておきたい。

6.1　観光資源としての変体仮名

変体仮名は、1900（明治33）年の小学校令改正を機に、すでに実用文字としての機能は失われている。しかしながら、そば屋の看板・暖簾（図6）や箸袋（図7）に代表されるように、商業用表記等に使用され続けている。商業用

図6　現代の商業用表記における変体仮名使用例（そば）

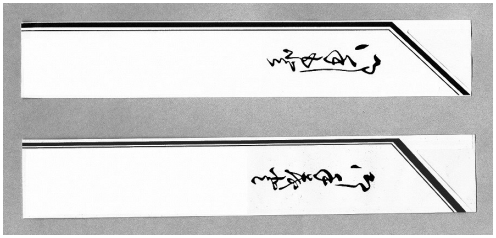

図７　現代の商業用表記における変体仮名使用例（箸袋）

表記に変体仮名を用いることは、飲食店に限らず、「和」であることを強調する意味合いが見られる。

現在、日本は観光立国を政策の一つに掲げ[6]、「和」の文化を色濃く残す地域に外国人観光客を誘致している。外国人観光客の多くは日本語もその文字も解さないが、変体仮名を景観の一つとして目にする機会が多い。変体仮名による商業用表記は、「和」であることを示すのだとすれば、観光資源の一部を構成する要素でもある。

しかしながら、日本語のネイティブの側に、現代における変体仮名の役割りについての認識が希薄であるため、ガイドブックでは十分な紹介がなされていない。

外国人向けガイドブックの中で、街中で目にする事物について比較的細かく取り上げて概説しているものに『英文絵とき事典 ILLUSTRATED A LOOK INTO TOKYO』改訂 17 版（JTB パブリッシング、2015 年）がある。例えば、「東京の工芸品」の項では、江戸提灯に書かれている文字を “Edo Moji” とし手紹介している（39 ページ）。また、同書の「日本橋の項」では、変体仮名で書かれた「“Lost Child” Stone」を紹介している（57 ページ）。イラスト中では変体仮名をほぼ正確に写し、英文で書かれた説明文で、碑文の意味するところを説く。しかし、イラスト中の文字が「現代用いられない古典的な文字・表記」であることにはふれない。これは、ガイドブックの怠慢ではない。文字・表記の研究者が、現代の変体仮名の機能について、十分に社会に発信していないということのあらわれであろう。

6.2　変体仮名の国際文字コード化

また、変体仮名は、国外でも新たな環境にさらされることになる可能性が出てきている。

2015年10月には、日本から国際文字コード規格ISO/IEC 10646規格へ変体仮名の追加提案が予定されている（高田・矢田・斎藤（2015））[7]。

変体仮名の追加提案は、日本語文字・表記史や日本史学の学術用途、および、戸籍など行政実務で使用を目的としたものである。しかし、国際文字コードに登録された文字は、言語を離れて世界各地で独り歩きをする。一旦、変体仮名が文字コード化されれば、読めなくても、図形として使用されることが可能になる。

6.3　変体仮名を知っておくことの意味

上述のことから、今後は、日本語のネイティブに対して、変体仮名にまつわる質問が向けられる可能性が以前よりも高くなるであろう。

今後、変体仮名学習用の教材としては、商業用表記に用いられている変体仮名について、日本語のネイティブ、外国人観光客、日本語学習者（日本事情等の教材）にも利用しやすい内容のものが必要ではないだろうか。

商業用表記での変体仮名や万葉仮名的な表記は、調査してみると、それほど多様性に富んでいるわけではない。ある程度のタイプに整理することが可能であるので、教材開発はそれほど困難ではないと考えている。

注

1　高田・小助川（2014）、129～130ページ参照

2　詳細は、高田ほか（2013）に記載

3　国立国語研究所webサイト「米国議会図書館蔵『源氏物語』画像（桐壺・須磨・柏木）」http://dglb01.ninjal.ac.jp/lcgenji_image/（2015年9月21日現在）

4　専修大学図書館企画展「和（やまとし）うるわし」、2011年11月12～23日（向ケ丘遊園前サテライトキャンパス）、2011年11月26日～12月3日（神田キャ

ンパス）

5　専修大学図書館企画展「和（やまとし）うるわし―日本語の風景―」、2015 年 7 月 1 日～10 日（生田キャンパス）

6　観光立国推進基本法（平成 19 年 1 月 1 日施行）、観光庁の発足（平成 20 年 10 月 1 日）に代表される。

7　高田・矢田・斎藤（2015）https://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/58/6/58_438/_article/-char/ja/（2015 年 9 月 21 日現在）

参考文献

高田智和・小助川貞次・堤智昭・斎藤達哉・小木曽智信・小野博（2013）「古典籍原本画像と翻字テキストの対照ビュアーの開発」『日本語学会 2013 年度秋季大会予稿集』、pp.225-228、日本語学会（2013 年 10 月 26 日発表、於静岡大学）

高田智和・小助川貞次（2014）「古典籍原本画像と翻字テキストの対照ビュアーの作成と教育利用事例」『国立国語研究所論集』8、pp.129-140、国立国語研究所

高田智和・矢田勉・斎藤達哉（2015）「変体仮名のこれまでとこれから―情報交換のための標準化」『情報管理』58(6)、pp.438-446、国立研究開発法人科学技術振興機構

謝　辞

古典籍原本画像と翻字テキスト対照ビュアーの作成は、「専修大学図書館所蔵貴重書を用いた日本語古典研究・教育ツールの開発に関する研究」（斎藤達哉・鈴木泰・小山利彦）として実施したもので、専修大学からの助成金（平成 25 年度専修大学研究助成第 1 種）をいただきました。

また、古典籍の画像撮影、および、対照ビュアーの企画展への試験導入は、専修大学図書館の理解と協力をいただきました。

以上、記して感謝申し上げます。